

ツンドラ・ネネツのトナカイ牧畜：群管理の構造と実態
(2005年ギダン・ネネツ春季キャンプ調査報告)

吉田睦

キーワード：ネネツ、トナカイ牧畜、群管理、個体認識、所有標識

1. はじめに
2. ヤマル・ネネツ自治管区のトナカイ牧畜
 - 2-1. 家畜トナカイ群の規模と構造
 - 2-2. ギダン・ネネツの家畜トナカイ群の特徴 (統計分析)
 - 2-3. ギダン・ネネツの家畜トナカイ群構成の実態
3. ギダン・ネネツの群管理技術と個体認識
 - 3-1. 春季キャンプにおける群の特徴と管理
 - 3-2. 個体認識と呼称
 - 3-3. 所有標識
4. 結語

1. はじめに

ネネツはロシアの先住少数民族の中では最大の人口を有し、2002年の国勢調査による人口は41,302人¹を数える。その居住地はウラル山脈の東西に渡る広範な地域であり、主として4つの自治管区に跨って居住している。そのうちネネツの人口が最大なのはヤマル・ネネツ自治管区で、26,435人を数える²。その中で現在もトナカイ牧畜に従事し遊牧生活を送っている住民 (以下「遊牧人口」) は1万3千人を数える³。トナカイ牧畜民の許で飼育されている家畜トナカイは、企業経営と個人経営の双方の経営形態を併せると、2005年年頭に54万8,325頭で、ロシア全体の家畜トナカイ頭数の4割を超える⁴。ヤマル・ネネツ自治管区におけるこの数値は、比較的信頼できる統計の記録されているソ連時代1930年代以降の最大値である。そのうち、企業経営下には20万2,174頭で管内総頭数の37%、個人経営下には34万6,151頭で63%と、後者のトナカイの方が2倍近い頭数となっている。⁵ (調査

¹ Фед. Служба госстатистики РФ. «Национальный состав и владение языками, гражданство». Книга 1. «Итоги всероссийской переписи населения 2002 года». Том 4. Стр.13. (ロシア連邦国家統計委員会『民族構成、習得言語、市民権』『2002年全露国勢調査結果』第4巻第一分冊、p.13.)

² Там же, стр. 93. (同上、p.93.) なお、ヤマル・ネネツ自治管区は75万平方km、人口約52万人(2005年)(ヤマル・ネネツ自治管区行政政府HP：<http://adm.yanao.ru/49/>による)。そのうち約7%に相当する3万6千人がネネツを含む先住少数民族で(同上：<http://adm.yanao.ru/50/>)。他にネネツの多く居住する自治管区は、ハンティ・マンシ(チュメニ州)、ネネツ(アルハンゲリスク州)、ドルガン・ネネツ(タイムイル)(クラスノヤルスク地方)の各自治管区。

³ ヤマル・ネネツ自治管区行政政府HP：<http://adm.yanao.ru/50/>による。

⁴ 2005年6月のロシア北方シベリア少数民族協会(RAIPON)での聞き取りでは、2005年の時点でロシア全体の家畜トナカイ頭数に関する正確な統計はなく、概数として130万頭という数値があるのみ、とのことであった。

⁵ ヤマル・ネネツ自治管区行政政府農業局資料による。

地の概略は図1参照；各図表の出典は稿末に記載)

2. ヤマル・ネネツ自治管区のとナカイ牧畜

2-1. 家畜とナカイ群の規模と構造

企業経営（ソ連期の集団化企業とポストソ連ロシア期の各種企業）と個人経営（ソ連期は個人副業経営）をめぐる上述した状況は、近年に特徴的になったものである。図2は1930年から2005年までのヤマル・ネネツ自治管内の家畜とナカイの総数並びに企業経営と個人経営（ソ連期は個人副業経営）の比率とその変動を示したグラフである。図2. から読み取れることは、まず、ソ連期の1940年代に農業集団化措置により企業経営と個人経営のとナカイ頭数が逆転し、前者が後者を凌駕する状況が続いたが、ソ連崩壊と共にまた個人経営が隆盛となり、現在に至っている。注目すべきは、ソ連期にも全ての家畜とナカイが集団化企業に没収ないし吸収されたのではなく、個人副業経営下に置か

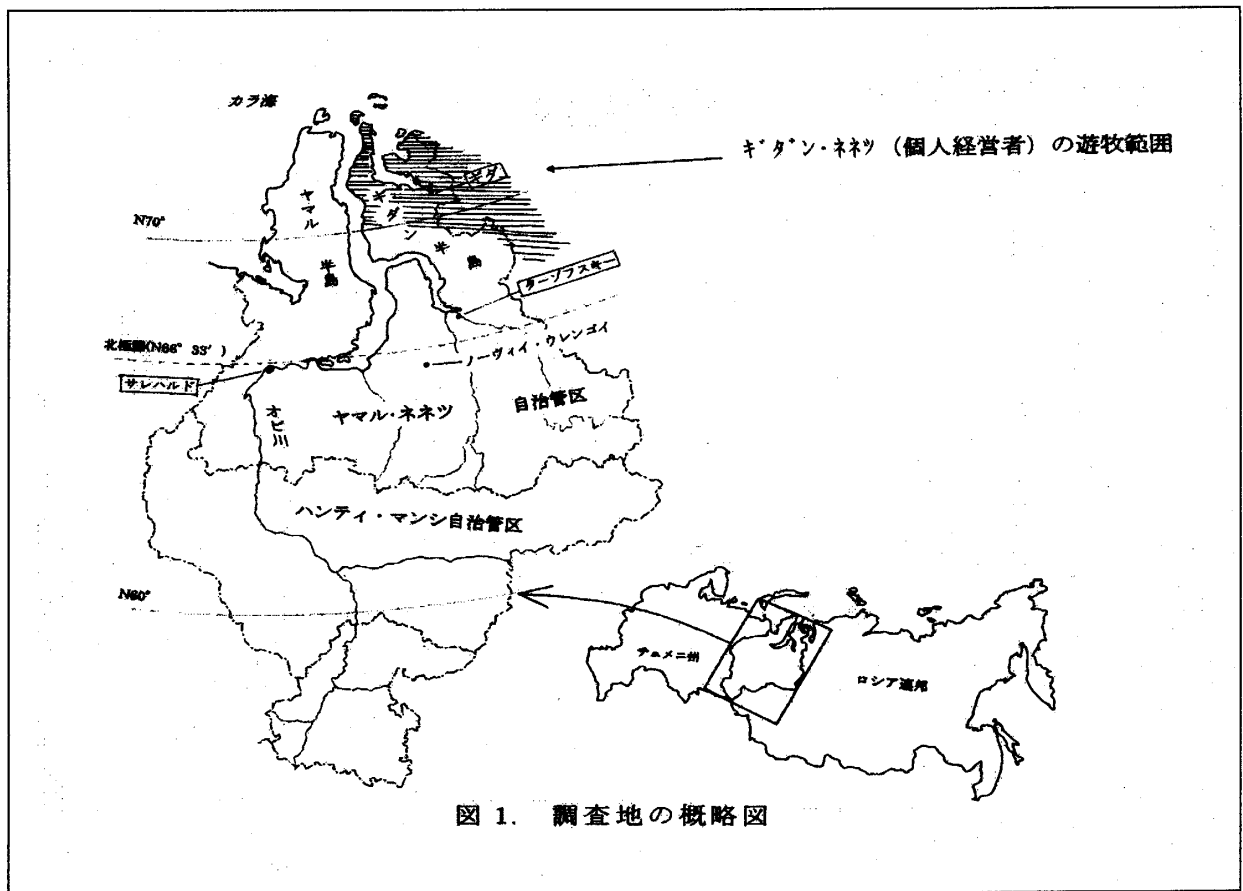
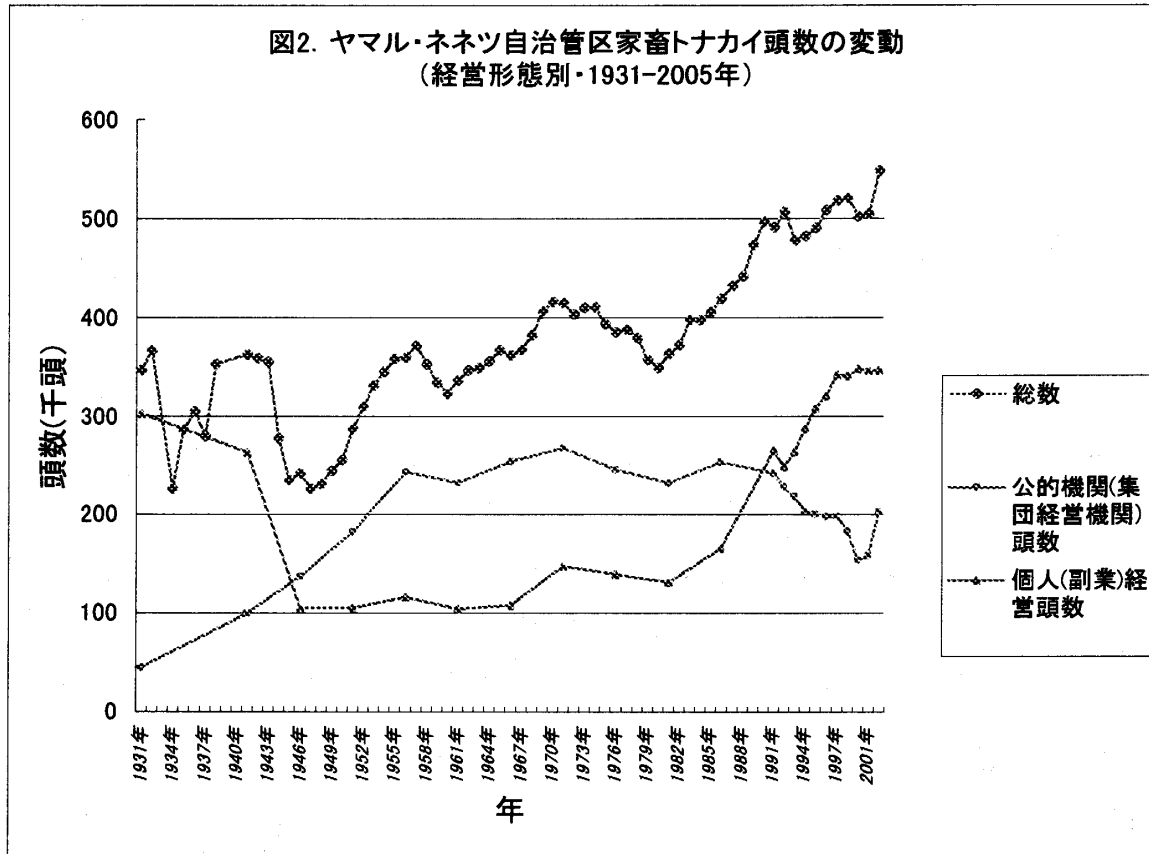


図1. 調査地の概略図

図2. ヤマル・ネネツ自治管区家畜トナカイ頭数の変動
(経営形態別・1931-2005年)



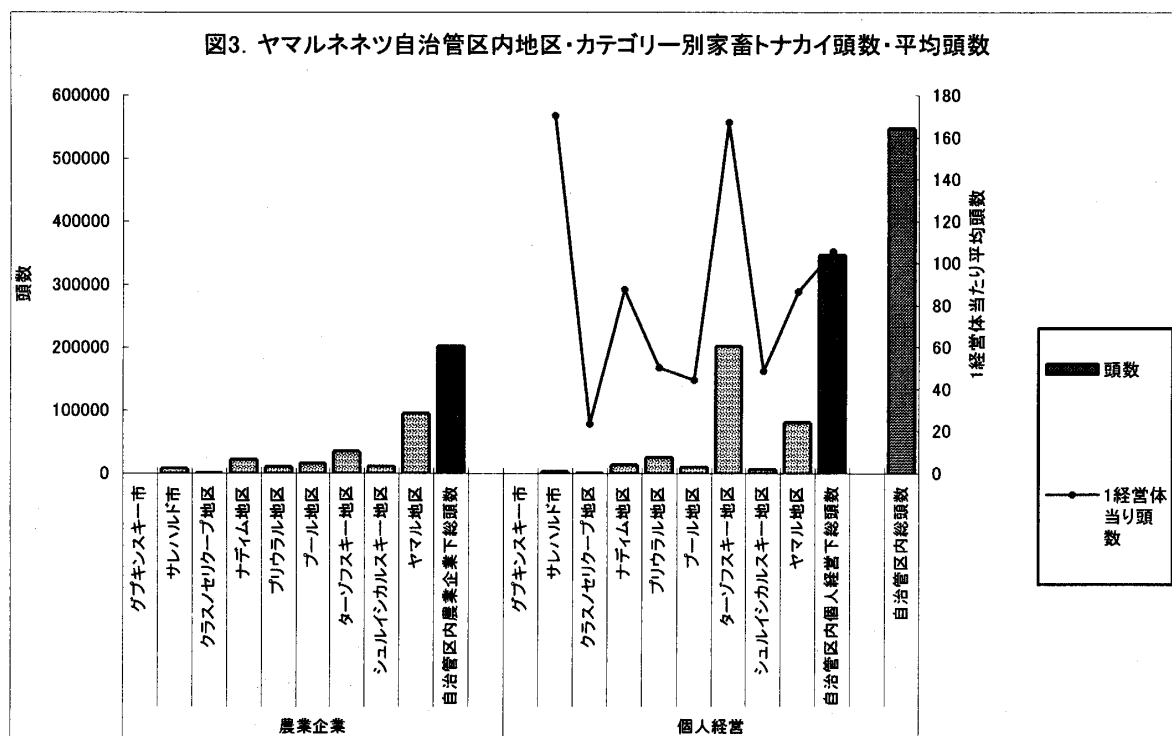
れたトナカイが一定の割合（公式統計においても、最低でも3割程度）存在したということである。⁶この点はソ連期の農業集団化全般、そしてトナカイ牧畜における集団化という視点のいずれからも興味深い点であるが、本稿ではこの点を指摘するに留めたい。この他にも、総頭数が20世紀を通じて全体として増加を続けてきたことや、現在の頭数が過去最高レベルであることなどが読み取れる。このことは、20世紀60年代以降急速に進められた、地下資源（石油・天然ガス）や森林開発の進展による牧地の減少という現実を考慮すれば、牧地のトナカイ可養力との兼ね合いから、決して楽観視してはられないことが推測できよう。また、ここ数年の農業企業体下のトナカイ頭数の復興傾向がみられる。これは、以下に言及するように、一部の地域で個人経営者が集まって協同組合型の企業経営を開始していることや、一部の旧ソフホーズや水産加工場等の旧国営企業系企業のトナカイ飼育経営が、生き残りをかけた企業努力の結果、安定化してきていることが関係していると考えられる。

ヤマル・ネネツ自治管区の中でも、遊牧人口の集中するのは、管区の北部に突き出た二つの半島（西方がヤマル半島、東方がギダン半島）の地域を占めるヤマル地区とターゾフスキー地区であり、家畜トナカイ頭数もこの2地区に集中している。即ち、前者に管区全体の32%、後者に同じく43%で、

⁶ ここではソ連時代を含めた社会主義期の公式統計、並びに牧畜、家畜頭数に関する統計の信憑性の問題には言及しないこととした。

両地区には管区全体の4分の3の家畜トナカイが集中していることになる(図3.)。この両地区の間でも、経営形態やその内訳に差異を見出すことができる。即ち、家畜トナカイ頭数においてヤマル地区は農業企業経営下に54%、個人経営下に46%と、前者が後者を僅かながら凌駕している。これに対してターゾフスキー地区では、前者が15%、後者が85%と、個人経営下のトナカイ頭数が圧倒的に多い。その他にも図3. は、地区により個人経営者の1経営体当りの平均トナカイ頭数に多寡があることを示している(右側折れ線グラフ)。そこからは、ターゾフスキー地区の個人経営者の経営規模が大きいことが読み取れる⁷。このようにターゾフスキー地区は、ヤマル・ネネツ自治管区内における個人経営によるトナカイ牧畜の中心地域とって過言ではない。そのことは即ち、ロシア、そして世界的に個人経営によるトナカイ牧畜が大規模に行われている唯一の地域であることを意味する。

ヤマル地区の企業経営の割合がターゾフスキー地区より高い理由の一つとして、管区都サレハルドに相対的に近いことにより、かつての個人経営者により組織された協同組合型農業企業が設立されたりして、現下の経済体制の下で経営の組織化への試みが進んでいることが考えられる⁸。筆者が2005



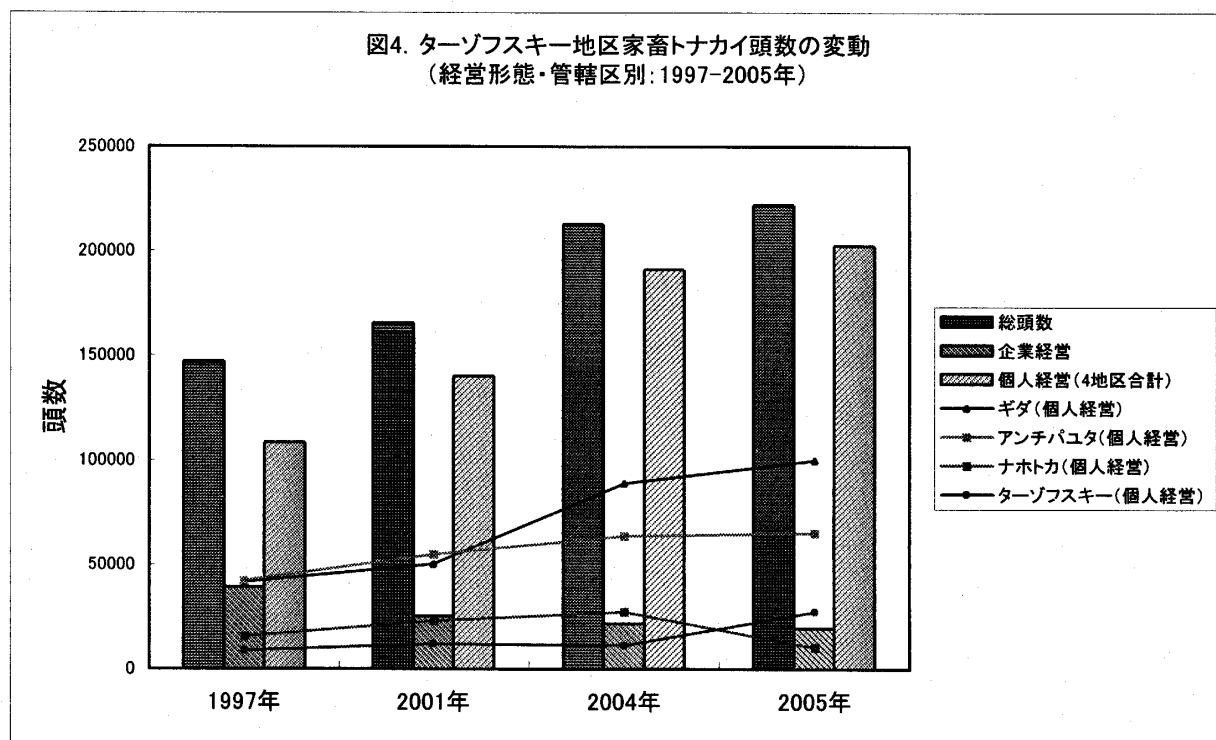
⁷ サレハルド市管轄下では、少数(24経営体)の個人経営者によるトナカイ牧畜が行われている。その全体頭数は僅か(管区内個人経営者の頭数の1%程度)である。

⁸ ヤマル地区では、2005年年頭現在、4公的企業体(合計62,376頭)と5氏族経営企業体(オープンナ)(合計33,024頭)が農業企業体として登録されており、それらの総頭数は95,400頭。ターゾフスキー地区は、同じく4公的企業体(うち1つは国営企業体)(合計19,445頭)と4氏族経営企業体(合計15,888頭)、総頭数35,333頭が農業企業体部門である。(ヤマル・ネネツ自治管区行政府農業局資料による)

年4月に訪れたサレハルド市内の総合小売市場（ルイノク）の一角にある精肉売場には、このような農業企業のトナカイ肉製品があちこちに並んでいた。筆者の経験では、少なくとも2000年頃までは、トナカイ肉が集落の小売店の店頭に並ぶのは屠殺が行われる秋から冬にかけての一時期だけであったことを想起すれば、市場経済文化の浸透が実感となって体験された一場面であった。

さらに個人経営トナカイ牧畜のメッカともいえるターゾフスキー地区⁹の近年の状況を概観しておきたい。ターゾフスキー地区内の経営形態別トナカイ頭数の比較と、管轄区別の個人経営トナカイ頭数の比較及びその変動を示したものが図4.である。筆者の手元にある1997年、2001年、2004年と2005年の各年データを比較したものであるが、この期間中全体頭数は一貫して増加しており、その増加は個人経営者のトナカイの増加分によるものであることも明らかである。というのも、2005年春現在、ターゾフスキー地区内には4つの企業経営体があるが、そのトナカイの総計は、この期間一貫して逡減しているからである。

個人経営のトナカイに関しては、ターゾフスキー地区内に4つある集落行政管轄区の頭数変動を図4.中に折れ線グラフで示した。これらの管轄区のうち、ギダ集落行政府とアンチバユタ集落行政府の管轄区が頭数の上で他の2つを凌駕している。この2つはいずれもギダン半島の北部（前者）と中部（後者）を管轄区としている。他の2つのうち、ナホトカ集落行政府管轄区はギダン半島の南部、ターゾフスキー集落行政府管轄区は半島の付け根付近に相当する。南部ほど木本性植物がより卓越する



⁹ ターゾフスキー地区の人口は約1万5千人で、うちネネツは2005年1月1日現在7069人。また、地区内の遊牧人口は5193人、うちギダ集落行政府登録分は、その約半数の2404人を占める（ターゾフスキー行政地区行政府北方少数民族委員会資料）。

ようになり、概して植生は豊富になるが、そこは外来者の集落や居住地周辺であったり、天然ガスやガス・コンデンサートの探鉱・開発・採掘地域が拡大したりしているため、それに関連する諸活動故に植生が荒廃している。即ち、地区全体で見れば家畜トナカイの頭数は増え続けているが、トナカイの放牧に適さない土地は南方より北方に向けて拡大し続けているのである。これらの4つの管轄区の中でも最も多くのトナカイ頭数を擁しているのが最北のギダ集落行政管轄下の個人経営者であり、本稿ではこの集団をギダン・ネネツと称している。

2-2. ギダン・ネネツのトナカイ群の特徴（統計分析）

家畜トナカイの群といっても、地域、民族、そして経営の形態や志向により多様である。それはまず、群の規模と構成という位相から考察することができる。群の規模や構成は、当該経営体の志向（商業的か自給的か）、経営形態（企業経営か個人経営か）、家畜個体の利用形態（橇牽引、騎乗、馱獣、乳利用の有無、肉利用の比重等）と密接な関係があると考えられる。ツンドラ・ネネツのトナカイ牧畜の特徴は、一般に大規模飼育、橇牽引利用、搾乳の欠如と言った諸点で説明されている。しかし、筆者はこの地域においても、企業経営（集団化経営）と個人経営（個人副業経営）との間では、飼育トナカイ群の規模のみならず、その構成や志向も異なることを指摘してきた。¹⁰ 上述のヤマル・ネネツ自治管区内の2005年の数値もその延長上で理解することができる。

図5. はギダ集落行政管轄下の個人経営者のトナカイ経営規模の状況を示したものである。即ち、各々の経営体の規模を飼育トナカイ頭数により6つのカテゴリーに分け、それぞれのカテゴリーに該当する経営体グループのトナカイ頭数、経営体数、そして経営体当たりの平均頭数を示した。トナカイ頭数は、中間的なカテゴリーである251-500頭のカテゴリーに最大のトナカイ頭数が集中している。他方、経営体数は飼育トナカイ101-250頭のカテゴリーが最大である。1経営体当たりの平均頭数は、頭数カテゴリー、即ち飼育規模の増加に比例して大きいことが分かる。この図からは、ギダ集落行政のツンドラ・ネネツにおいては、少数の大規模経営体が存在すること、そこに家畜トナカイの多くが集中していることも読み取ることができる。

これらのデータの中から、群の再生産に関与するメスと種オス、そして群の性格（利用形態）に

¹⁰ 次の拙稿3件において指摘した：Yoshida A. "Some Characteristics of the Tundra Nenets Reindeer Herders of West Siberia and their Social Adaptation", In: Anderson D. Ikeya K. (eds) 'Parks, Property, and Power: Managing Hunting Practice and Identity within State Policy Regimes' (Senri Ethnological Studies 59), Osaka: National Museum of Ethnology, 2001, pp.67-80.; 吉田睦「シベリア・ネネツのトナカイ飼育の現在-個人経営の現状とその特徴-」、井上絃一編『社会人類学からみた北方ユーラシア世界』北海道大学スラブ研究センター、2003. pp.67-77.及び Ёсида А. «Современное оленеводство тазовских ненцев». В кн.: «В поисках себя. Народы Севера и Сибири в постсоветских трансформациях» Москва: Наука, 2005, стр. 40-64. (吉田睦「ターゾフスキー・ネネツの現代トナカイ牧畜」、『自己の探求-ポストソ連期の変動における北方・シベリア諸民族』モスクワ: ナウカ. 2005, pp.40-64)。

図5. ギダ集落行政管轄下個人経営者の頭数カテゴリー別内訳
(頭数、経営体数、平均頭数: 2005年年頭現在)

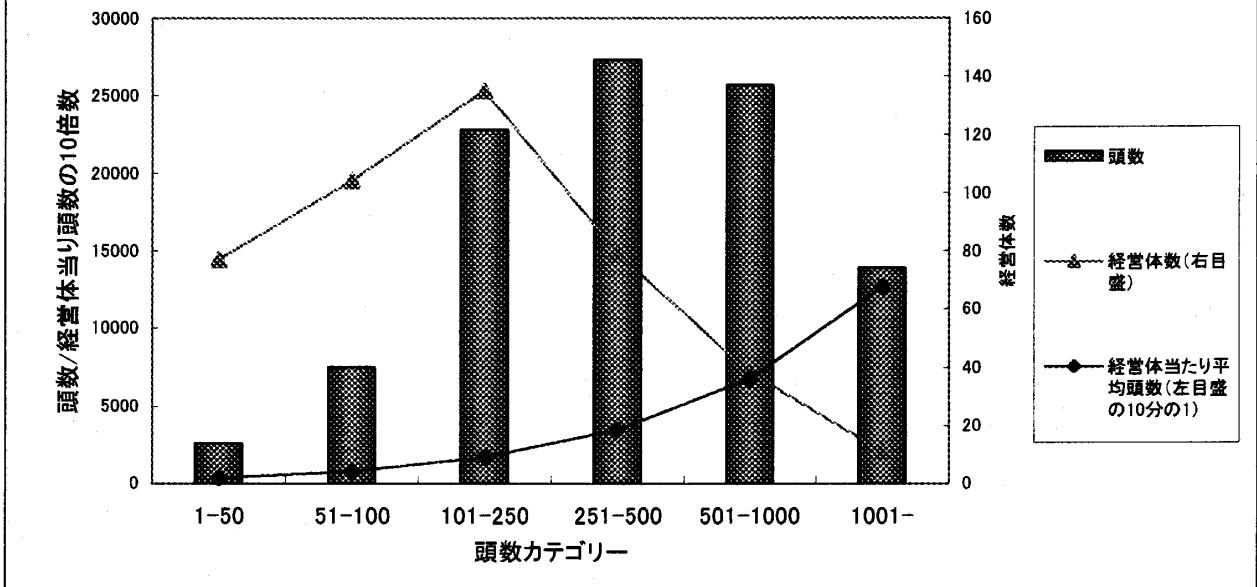
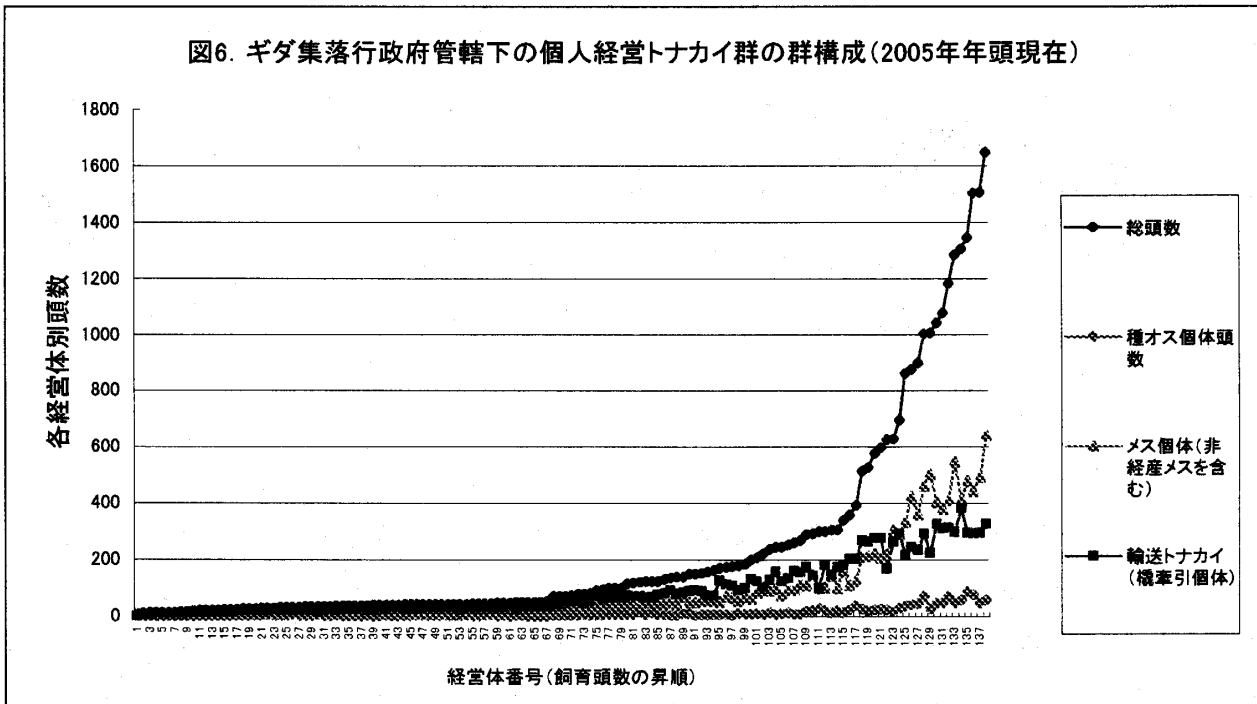


図6. ギダ集落行政管轄下の個人経営トナカイ群の群構成 (2005年年頭現在)



関与する輸送トナカイについて分析することを目的として示したのが図6.である。この図には必要なデータを転写することができた138経営体分のデータが示されている。まず、経営体の規模とそれに対応するメス(非経産個体を含む)個体についてであるが、図6.に掲げた経営体全体の頭数に占める

メス個体の割合は 38%であるが、経営体サンプル数 138 のうち、その群におけるメス個体の比率が 0-49%である経営体数は全体の 84%という数値を示す。この図を見ると、メス個体の割合は、群全体の頭数増加に一定程度比例して増加することが見て取れる。このことから、メス個体は、出産につながるため、一定の割合を保持しておくことが群管理上重要な戦略であることが伺われる。しかし特に 400 頭以上の群においては、群の頭数増加率より低率での増加傾向が見て取れる。

オス（種オス）個体の場合はどうであろうか。同じ 138 経営体サンプルの総頭数の中でオス個体の占める割合は 5%で、経営体別の頭数の偏差は、最小値 0%、最大値 20%で、10%を超えることは稀である。千頭以上を擁する大規模経営カテゴリー（11 経営体）を取り上げてみると、その総トナカイ頭数は 13,888 頭であるが、そのうちオス個体は 643 頭で、4.6%に過ぎない。図 5 の折れ線グラフを見れば明らかなように、オス個体は飼育頭数が 400 頭を越えて急激な右上がりのカーブになっても、X 軸を這うように推移している。一定のオス個体頭数があれば、かなりの頭数の群の維持が可能という状況が読み取れる。



写真 1

未だ氷雪に閉ざされた 5 月半ばの集落
ギダ（北緯 70 度 54 分東経 78 度 32 分）

集落定住者の人口は 849 人、遊牧する経営体（家族）数は 441、人口 2,404 人（2005 年年頭現在）¹¹

次に群に占める輸送トナカイ、即ち、橇牽引に用いる個体の割合を見てみたい。筆者はすでに、ギダン・ネネツの個人経営トナカイの牧畜民の許では、企業経営の場合と比較して、一つの群に占める輸送トナカイの割合が明らかに高いことを指摘してきた¹²。このことは、トナカイ橇が各種の移動手段として個人経営者の中では多用され、彼等の生活の維持のために非常に重要な役割を果たしてきたことを如実に物語っている。そしてそのような生活に必要な一定数のトナカイ橇を保持し、維持していくために、橇を牽引する一定数の個体の維持が不可欠であることを示している。2005 年の調査で

¹¹ ギダ集落行政資料による。（上掲の台帳上の数値〔444 経営体〕とは経営体数が異なる。）

¹² 上掲 Yoshida 2001, 吉田 2003, 及び Ёсида 2005。

輸送トナカイを含めて行政統計における全ての群構成要素¹³の頭数を記録できたのは 78 経営体である。その飼育総頭数は 20,025 頭、うち輸送トナカイは 8576 頭で、43%を占めている。また、これらの経営体の去勢オス総頭数は 6,446 頭で 32%を占める。このサンプルは、経営規模が 9 頭から 1,504 頭までの様々な経営体のものであるが、平均的な中規模、即ち 100 頭台から 300 頭台までの経営体のみを抽出してみたい。これらは 38 経営体で、その総頭数は 7,667 頭、うち輸送トナカイ総数は 4,315 頭で、全体の 56%を占めている。その去勢トナカイ頭数は 2,335 頭で 30%である。このように、数の上で多数派である中規模の経営体でみると、輸送トナカイの割合が過半数を占めるという状況になっている。しかも去勢トナカイ数をかなり上回る個体が橇牽引個体として使用されている実態がこれらの数値により裏付けられているといえる。

このことから分かるように、個人経営体においては、そもそも「輸送トナカイ」というカテゴリーは、去勢オスのみならず、他のカテゴリーの個体、とりわけメストナカイの多くを含むものであり、メストナカイが橇の牽引に使われているのである（写真 2, 3）。この点は企業経営体のトナカイ群の機能的実態との大きな相違点の一つといえる。企業経営体の場合、通常、輸送トナカイとして登録するのは去勢トナカイそのものであり、両者の数は機械的に同数となっている。¹⁴

次に経営規模との関係で輸送トナカイの割合についてみてみたい。図 6.において示されるように、各経営体頭数が 400 頭台までは、輸送トナカイは群の半数近くを占めているが、それ以上の大規模経営体では、種オスの割合ほどではないが構成比が低下し、20%台を超える程度になっていることが判



写真 2

去勢トナカイだけからなる一般的な男性用乗用トナカイ橇 左が御者のネネツ男性、右は添乗していた妹。去勢トナカイは冬季に角を落とし、この季節既に新しい角（袋角）が生え始めている。

（2005 年 5 月 2 日 ギダン・ツンドラ内タナマ物資交易所にて）

¹³ 総頭数、2 才以上の種オス、メス（1.4 才から 2 才までの未経産個体を含む）、去勢オス（2 才以上）、1 才から 2 才までのオス、幼獣（1 才未満）、輸送個体

¹⁴ 2005 年の企業経営トナカイの統計には、前回 2001 年の調査時までは記載されていた「輸送トナカイ」の頭数記載項目はなかった。その理由は不明。

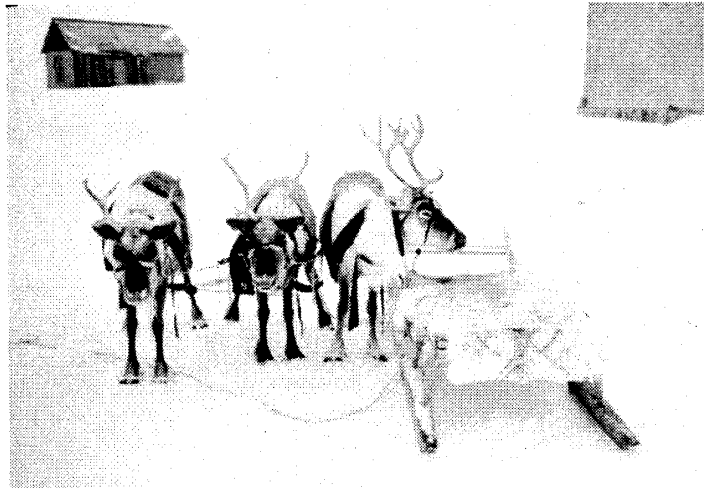


写真3

メストナカイだけで編成されたトナカイ橇（2005年5月3日 ギダン・ツンドラ内タナマ物資交易所にて）

メスは出産を控えたこの季節まで前年の骨化した角を有している。

明する。即ち、群が一定以上の規模になると、トナカイ橇牽引個体の割合が低下する。サンプルに挙げた 800-1,500 頭程度の群の場合、一定数の輸送トナカイ、即ちトナカイ橇があれば生活上の需要が賄え、また群管理にも一定数のトナカイ橇で行うことができる、という状況が窺い知れるのである。さらに大規模経営体の群の内訳で目立つのは、幼獣が多いことである。このことは、更なる群の規模の拡大の可能性を有していることを意味している。このように、大規模経営体は、群の規模の維持や拡大のための諸条件を兼ね備えて、安定的な経営を可能にしているといえる。

2-3. ギダン・ネツの家畜トナカイ群構成の実態

以上の考察では、統計データを用いて、一定の行政管区（管区、地区、集落行政府）やカテゴリーの総計によるトナカイ頭数をもとに分析を加えたものであった。それに対して、以下では実際の個人経営者のトナカイの群についての考察を行なうものである。2005年の調査では、3つの経営体のデータを入手した。これとの比較の意味で2001年11月の調査時¹⁵のやはり3つの経営体のデータも参照し、両者を比較することとしたい（表1参照）。

まず2001年のA、B、Cの3つの経営体から見てみたい。表1に示す通り、これらの経営体の経営規模は、それぞれ53頭、70頭、71頭という少数で、零細経営のカテゴリーに属する。その群構成は現認ではなく聴取したものであるから、実態とずれがある可能性は排除できないが、筆者はトナカイの現数を確認する手段を有さないため、このデータをもとにせざるを得ない。それによれば、メス

¹⁵ 2001年の調査は、財団法人味の素の文化センター第12回食文化助成（平成13年度）の枠内で行われたものである。

表 1. ギダン・ネnetz(個人経営者)のトナカイ群内訳(2001年11月及び2005年5月各3経営体)

| | 家族数 | 総数 (=a+b+c+d) | 種オス/a/ /b/ | メス(含 非経産) | | 去勢オス /c/ | 幼獣(一才未満) /d/ | 輸送トナカイ |
|----------|------|------------------|---------------|--------------|-----|-------------|-----------------|--------|
| | | | | | | | | |
| 2001年11月 | A経営体 | 5 | 71 | 3 | 32 | 27 | 9 | 56 |
| | | | 100% | 4% | 45% | 38% | 13% | 79% |
| | B経営体 | 3 | 53 | 3 | 30 | 17 | 3 | 49 |
| | | | 100% | 5% | 54% | 30% | 5% | 92% |
| | C経営体 | 6 | 70 | 4 | 20 | 28 | 18 | 52 |
| | | | 100% | 6% | 29% | 40% | 26% | 74% |
| 2005年5月 | D経営体 | 6 | 233 | 20 | 80 | 70 | 63 | 120 |
| | | | 100% | 9% | 34% | 30% | 27% | 52% |
| | E経営体 | 6 | 173 | 20 | 70 | 55 | 28 | 125 |
| | | | 100% | 12% | 40% | 32% | 16% | 72% |
| | F経営体 | 7 | 207 | 15 | 72 | 70 | 50 | 90 |
| | | | 100% | 7% | 35% | 34% | 24% | 43% |

個体の比率は29-54%と開きがあるが、種オスは4-6%とほぼ同程度の比率となっている。輸送トナカイは74-92%と高率である。経営体B、Cは、輸送トナカイ頭数が、メスと去勢オスの合計より多くなっているが、これは種オスをも輸送トナカイに使っている(あるいは実際はともかく、少なくともそのように算入している)のである。輸送トナカイの割合の高さをみると、総頭数が100頭を下回る零細型のいずれの経営体も、幼獣以外の成獣のほとんどを橇牽引に利用しているという実態が窺い知れるのである。この数値は、現地での聞き取りでも、橇には幼獣以外のいずれのトナカイでも繋げることがありうるとしばしば語られることを裏打ちしている。

これに対して2005年に滞在することになった経営体は、偶然であるが2001年に比べていずれも経営規模がより大きい中規模経営であり、200頭前後の頭数を有する経営体であった。これらの経営体の群は、まずメス個体の比率が34-40%と比較的一定であるが、上記の2001年の零細経営者のケースと比較して、一つの経営体を除き、低めの数値である。これは、この地域において一定の再生産数を確保するために必要なメス個体の数を確保するための均衡した割合に近いものであることが類推される。これに対して、オス個体の場合は、9-12%と零細経営者のケースと比べて多い。この数字は、オス個体数の判明している行政府資料の経営体別生計台帳150経営体全体の平均(5%)と比べても高率といえる。このように、調査経営体の群が比較的高率のオス個体を擁する理由については、解明できなかった。

輸送トナカイについては、まずE経営体での聴取の際、「うちは去勢オスとメスの全てに橇を曳か

せる」と言われたとおりの数値（聴取した輸送トナカイ数が、メスと去勢オスの頭数の合計）となっている。このように、2001年の零細経営者では、一部去勢個体とメスのみならず一部種オスも橇牽引に利用している可能性があった（但し種オスが橇を牽引している姿を現認はしていない）。中規模経営者の場合、輸送トナカイは少なくとも去勢個体と健全なメスの範囲内から選ばれている実態が窺われる。2005年の200頭以上を擁するD、Fの経営体も、輸送トナカイ、即ち橇牽引個体は去勢個体のみには依存する状況にはない。このように、中規模経営体でも、健全なメス個体を含む群の半数程度のトナカイを橇牽引個体として利用する程度に、個人経営者の日常生活において移動・輸送手段としての橇とその牽引力としてのトナカイに依存しているのが実態である。

3. ギダン・ネネツの群管理技術と個体認識

3-1. 春季キャンプにおける群の特徴と管理

2005年5月の調査は、筆者のこれまでの調査期間（1995年3-4月、1996年6-7月、1997年12月-1998年1月、2001年11月）と時期的に重ならなかったため、季節的な特性に係わる新たな情報を得ることができた。中でもトナカイの出産期にあたったことは貴重な経験であった。一般に、春季キャンプにおけるトナカイ群の特徴として、（1）群の規模が小さいこと、（2）メスが出産期を迎えること、（3）一部を除き種オス、去勢オス共に角を有しないのに対し、メスは角を有していること、（4）年齢階梯上の季節的特色（委細後述）などが挙げられる。これらの諸点について、ギダン・ネネツのもとで観察した実態に基づき記述・考察してみたい。

まず（1）の群の規模（頭数）については、ツンドラ・ネネツの場合、夏季には幾つかの経営体が集合する傾向にあり、概して大規模になる。その理由はいくつかあろうが、まず、牧地に関して夏季は冬季と比較してトナカイの餌となる植生が圧倒的に豊富であり、その一定の面積当たりのトナカイ可養力が大きいことが挙げられる。次にツンドラ・ネネツの特徴として挙げられることであるが、漁撈従事者が自己の群を親族等の牧畜専門者に放牧委託をすることによる。ギダ集落にある1996年まで国営であったギダ水産加工場の漁獲活動の一環として、夏季の開氷期に特定の集団がいくつかの魚場において漁撈を季節的に専業し、現金収入を得てきたのである。¹⁶自己の群に加えて漁撈従事者の群を預かったトナカイ牧畜者の群は、必然的に大きくなる。また、夏季はツンドラで発生するハエ、アブなどのトナカイにとっての害虫を避ける必要があるが、そのために一定の規模を有する群れの方が管理しやすいという点がある。¹⁷さらに、これらの害虫は風の恒常的に吹く傾向にある海岸部で

¹⁶ ギダ水産加工場は、1996年以降はターズフスキー地区行政府自治体経営となったが、2004年5月に事務所を火災で焼失してからは、ギダアグロとギダ水産加工場に分割された。その後2005年の調査時には、後者の経営は事実上破産状態にあった。

¹⁷ 群の外側にいるトナカイは、害虫被害にさらされやすいため、それらを避けて群の中に入ろうとする。そのような場合、群が大きいほど、害虫から逃れるのが容易ということらしい。

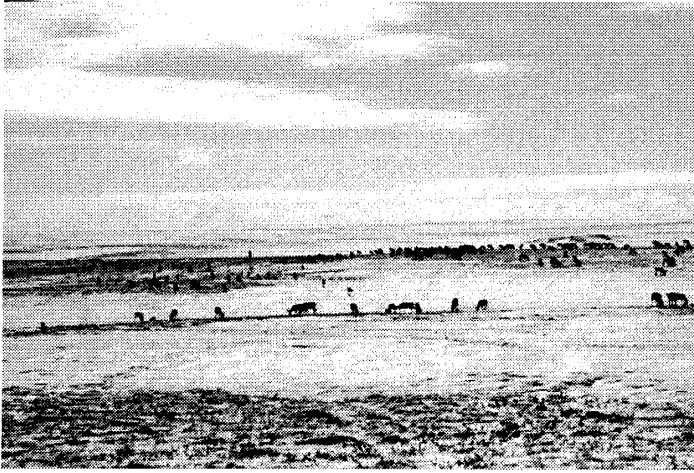


写真 4

朝、キャンプ地周辺に散開していた群を集めてきた途上の状態。左前方に徒歩で集群してきた牧夫がみえる。この群は単一経営体分からなる（上掲表 1 の F 経営体）。

（2005 年 5 月 22 日）



写真 5

朝の集群作業でキャンプに戻されてきた群。そのトナカイ数は 200 頭余。住居のテントが中央奥にみえる。

（2005 年 5 月 22 日）

は少ないため、夏季の放牧地として沿岸部を利用するケースが多いが、沿岸部は、一方が海岸線で区切られるという地形上の条件からも大規模な群管理が比較的容易である。ギダン半島の場合、沿岸部というのは北部に位置するため、夏季には多くの経営体が北方沿岸部に移動する。

これに対して冬季は上記のような夏季の状況の裏返しである。従って、冬季キャンプから北方への長距離移動を開始し始めるまでの春季キャンプは、基本的に冬季キャンプの延長といってよい。冬季から春季のキャンプは、1-2 軒の少数のテントから構成されることが多い。このような場合、家畜群も通常単一経営体の群から成るか、2 ないし 3 経営体分が混じっているが、移動時も一緒にそのまま移動していく場合には、特に問題は生じない（写真 4,5）。しかし複数経営体分の群から構成されていて、個々の経営体がそれぞれ、または一経営体のみが新たなキャンプ地を目指して移動していくこともある。その場合には、群の分割の必要性が出る。キャンプにおいて一群となってしまった群れを二つに分割するのは容易なことではない。筆者は 2005 年 5 月にあるキャンプで群の分割の場面に遭遇

したが、朝 9 時から夕方 18 時まで断続的に続く長時間の作業であった。時間を要するとはいえ、柵もないキャンプ地において群が 2 つに分け隔てられるのは、トナカイの群居性と、個々の個体のそれぞれの群への帰属性という習性に依存せざるを得ない、という実感を経験することができた。その詳細の記述は別稿に譲りたい。



写真 6

キャンプ地内で主群から離れて嚙草する、母仔だけで構成された小集団（幼獣は皆生後 1-3 日程度）

（2005 年 5 月 19 日）

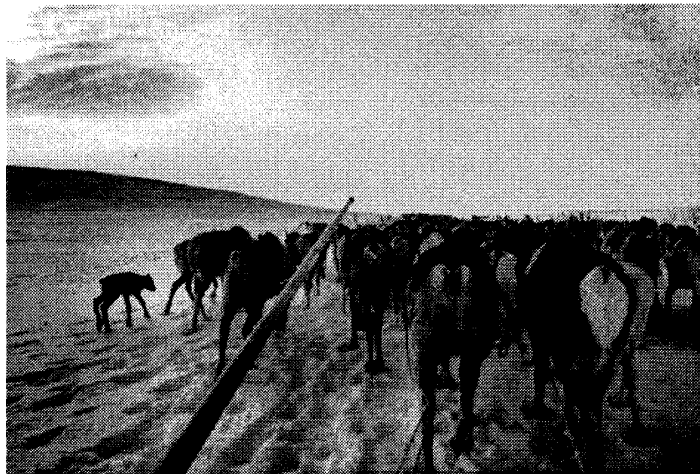


写真 7

移動時のキャラバンに混じって、母親に続いて必死に進もうとする新生個体（左端）

（2005 年 5 月 8 日）

ギダン半島の北部においては、出産の時期は 4 月末から 5 月中旬くらいまでが最盛期と言われている。ネネツの民族暦では、西暦の 5 月に相当する月の名称の一つとして「Ty nitsj（トナカイのお産）」といわれる¹⁸。2005 年 5 月初旬から中旬にかけての筆者のキャンプ滞在時には、まさに出産が次から次へと行われる時期であった。出産に際しては、牧畜技術全般との関係でいえば、動物種や牧畜管理技術如何では、一時的な母仔群の分離が行われることがあり、群管理上一定の意味を有する。個人経

¹⁸ ネネツの民族暦では、4 月はトナカイの早産を意味する「偽りの出産（Sie nitsj）」という名称で呼ばれる。因みに、ネネツの民族暦の 1 ヶ月は太陰暦であるため、太陰太陽暦である西暦とはズレがあり、新月から新月までの 1 カ月とされる。

管ネツのトナカイ牧畜においては、母仔群の分離は通常行われぬ。しかし出産自体、群から一定の距離をおいて行われる傾向にあるといわれ、また、出産当初の母仔は群から離れる傾向にある（写真6参照）。それは、母親が他の個体から新生個体を保護し、安全な給餌の場と状態を求める本能的行動という要因があろう。¹⁹人間による管理の側からすると、そのような母仔を群から離れないように配慮すること、あるいは群から離れて嚙草する母仔を群に合流させることは、この季節の群管理技術の特徴の一つといえる。とはいえ、母仔が群から一定の距離を置くことがあっても、それは群からの離脱を試みている訳ではない。つまり、母仔は状況に応じて群に自然復帰するので、牧畜管理上、とりわけ困難な状況とはいえない。

(3)の角の有無は、トナカイにとって群の中の行動に関して決定的ともいえる意味を有する。つまり、群を構成する個体の間における支配権、指導権の獲得、喪失ということに通ずる。²⁰夏季から発情期や交尾期を迎える冬季の初めまでは、種オスや去勢オスが大きな角を保持しているため、群や餌確保のためのテリトリー支配は、オス、特に老練なオスの権力が圧倒的である。これに対して、冬季から春季にかけては、これらのオスは次々に角を落としていく。それと同時に、支配権や影響力も失うことになる。反対に、出産時まで角を保持するメスに支配権が移るという現象が出現する。筆者の滞在したキャンプでは、幼獣を擁するメスは、不用意に幼獣に近づく個体の如何に拘らず、これらを容赦なく角を突きつけて追い払う行動が観察された²¹。このように、家畜トナカイ群においては、季節により雌雄及び去勢個体間で角の有無の時期にズレが生ずるというトナカイ特有の現象により、群の中の相互関係やテリトリー支配権の変動が顕著にみられるのが特徴の一つといえる。人間の側から、このようなトナカイ固有の行動をどの程度群管理のために利用しているか、というような点は今後研究の余地があると思われる。

(4)にいう年齢階梯上の季節的特色として、出産期以前、即ち新生個体の出現の前の段階では前年出生の幼獣も一定の成長をした個体となっていることが挙げられる。それ故、牧畜管理上、群が安定している時期ともいえる。それに対して幼獣を抱えた群は、人間の側も、そしてトナカイ自体としても、幼獣への配慮をしないわけにはいかない。その点、他の要素に対する配慮の程度や時間が小さくならざるを得ない。出産開始とともに群管理の状況がかなり変化するわけである。

ツンドラ・ネツのトナカイ牧畜の場合、人間が出産の行為自体に介入することはほとんど無いと

¹⁹ 筆者の調査時には、出産は夜間にも昼間にもみられた。夜間の出産の現場は確認できなかった。昼間の場合は、キャンプから離れた群の中の場合や、キャンプ内など様々であったが、群から距離をおいて出産がなされる状況は確認できなかった。他方、母仔は群から数百メートル程度まで離れて嚙草行為をする光景がしばしば観察された。もっとも嚙草時には群自体が散開状態にあるため、母仔群のみが目立って離れているということでもない。

²⁰ Paine R. "Herds of the Tundra. A portrait of Saami Reindeer Pastoralism", Washington and London: Smithsonian Institution Press. 1994, pp.206-209.

²¹ 筆者の観察する限りにおいて、人間に対しては、新生幼獣に接近したり、触れたりしても、畏怖からか、慣れからか、あるいは保護者としての信頼からか、立ち向かってくることはない。

いわれる。むしろ人間が幼獣に接触することを極力避ける。一般に各種家畜の牧畜において、人間の匂いが幼獣につくと母親個体が授乳を拒否する、あるいは極端な場合、実子であるという認識を失う等の反応を示すことがあるといわれるが、トナカイ牧畜についてもそのことがいえるようである。少なくともツンドラ・ネネツにおいては、幼獣への接触を避けるプラクティスが認められる。今次調査時の筆者の経験では、次のようなエピソードがあった。E 経営体において男性牧夫3名（主人とその兄2名）が、夜間にキャンプから離れた所に散開していた群を、午前中にキャンプに集めてきた際、テントまであと200メートルくらいの雪上に新生個体が動けなくなってしまうと、母トナカイはその近傍を歩き回っていた。実はその前日夕方、新生個体が1頭死亡していた。その出来事が脳裏にあったため、筆者は、この新生個体も同じ運命を辿ることを危惧して、抱きかかえてテント近くにいた女性成員（主人の姉）に見せて、どうすべきか相談したのであった。上述のように、人間との接触を避けるべきということは念頭にあったが、そのままにしておくほうが悪い事態となることを危惧したためであった。筆者もネネツの牧夫と同様の手袋付き毛皮外套マリチャを着用していたため、手や体が直接トナカイに接触することはないということは一応考えた。新生個体を暫し観察した姉は、歩き疲れた程度で、そのままにしておけば回復するだろうから、雪上に置いておけばよい、と指示した。仔を抱いてつれてきた筆者を叱責することはなかった。仔を持ち去られた母トナカイは、その仔が雪上に戻されてからもしばらく、群の中を徘徊して仔を見つけられないでいたが、筆者が少し目を離している間に、（仔の臭いをかぎつけたのであろうか）仔を見つけ、仔とともにその場を去った模様であった。

新生個体の存在は、群の機動性を少なからず低下させることになるだろう。筆者がそのことを実感したのは、D 経営体でのキャンプ地移動（2005年5月8日）時である。第一キャンプ地から北西方向に、距離にして15km程度を3時間45分かけて移動したその日は、気温マイナス8度前後とこの季節においても特段低温とはいえないが、強風ゆえにネネツも顔を紅潮させて口数の少なくなるような天候であった。主人の6才になる娘は、新キャンプ地に到着した際身体が凍えて声も出ず、身動きすらできなくなったくらいである。そのような条件の移動において、当日生まれたばかりの新生個体も含め、移動キャラバンとともに進むトナカイ群に遅れまいと必死に歩を進める新生個体とその母親の姿が印象的であった（写真7）。主人は時に遅れがちになる母仔を監視しつつ、キャラバンの最後尾について群の全体の状況把握に努めた。逆に言えば、新生個体といえどもこの程度の移動に耐え得るのである。とはいえ、幼獣の出現と存在により、群管理の性格や様相が変化することは否定できない事実である。

この時期のもうひとつの特徴として、木の枝やトナカイの角でできたロンガリ（longali）と呼ばれる障害物を首に掛けた個体が群の中の一部に見られることである（写真8）。2005年の調査時には、これまで見たことがなかった空のペットボトル製のロンガリまで出現した。現地での聞き取りによる

と、ロンガリは、新生個体の出現する4月末から6月末頃までの間に元気の良い去勢オスなどを中心に施す。首から下がった棒状の枝や角は、前足の動きの障害となり、歩行、走行に支障をきたす。その目的は、主として春季の出産期から2ヶ月程度の間で使用して、幼獣を踏みつけないようにすること、並びに投げ縄による捕獲を容易にする点である。従って、ロンガリを掛けるのは、専ら橇牽引の頻度が高く、逃避走行する性向の強い去勢トナカイである。

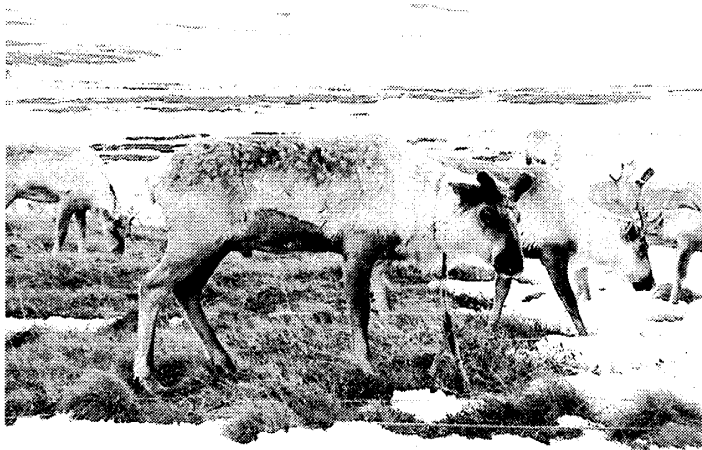


写真 8
木製のオーソドックスなロンガリを首から下げた去勢トナカイ (2005年5月17日)

因みに、トナカイの動きを直接制限する方法は、ツンドラ地域よりタイガ地域でのトナカイ牧畜においてより普及、発展してきたものといえる。タイガ地域では文字通り足枷状のものを足に履かせるケースがあり、動きを制限する程度が高い。これに対してロンガリは、歩行程度ではさほどの障害とはならないが、走行になると直接足に触れたり、当たったりするため障害となる、というもので、動きを制限する程度が低い。ロンガリは、ツンドラでのトナカイ牧畜技術の一つとして興味深いものであると同時に、タイガ型トナカイ牧畜との関連をも想起させる。そもそも牧畜民の間では、家畜に何らかの障害物を設置して、その動きを制限するような用具が多数見受けられる。ネネツに関しては、ネネツ研究の第一人者であるロシアの民族学者 L.V. ホーミチが、ロシア語名で「ボタロ」と称する器具について言及している。²²ホーミチの言う「ボタロ」は、「家畜が居住地から遠方に行くのを妨げようような、首に掛ける角ないし木製の棒」のことで、ツンドラ・ネネツでいうロンガリそのものである。ホーミチによれば、ボタロは、他のいくつかの要素（害虫除けの燻し火、トナカイ小屋、足枷）と並んで、森林型（タイガ型）トナカイ牧畜の典型的要素であるとしている²³。筆者はトナカイ牧畜

²²元来ロシア語でいう「ボタロ」というのは、群居する家畜のうちのリーダー個体などの特定の個体が首に掛ける金属性の鐘のことで、その存在を音で認知するための用具である。その一般的な用途は、人間が群の動きや位置を認知する必要性が主要なものであろうが、他の家畜が特定個体の鐘の音に追従する効果も期待できるかもしれない。この点は筆者の推測であり、確認を要する。

²³ Хомич Л.В. «Проблемы этногенеза и этнической истории ненцев». Ленинград: Наука. 1976. Стр. 78. (ホーミチ L.V. 『ネネツの民族起源と民族史の諸問題』レニングラード: ナウカ、1976、

民におけるこのロンガリ型器具の普及についての情報をこれ以上持ち合わせていないが、ツンドラ型とタイガ型トナカイ牧畜における牧畜管理技術の結びつきを窺わせる要素の一つとして興味深い点であることを指摘するに留めたい。

動きを制限するものではないが、この他にもネネツのトナカイ牧畜においては、タチカン（ロシア語名）という、群先導個体等の角に金属製ないし木製の棒状用具（音の出るように金属ないし角がぶら下がっている）を取り付けることがある。²⁴この方法はヨーロッパ・ネネツの企業経営体を中心に適用されているようである。これは先導個体の存在とその場所を牧夫や他の個体に知らせることで、平時や緊急時の群全体の統率・管理に資するというものであり、ウシ、ヒツジ等につける鐘の類に入るものといえる。トナカイ牧畜でも、例えばトゥヴァやエヴェンキといったタイガ型トナカイ牧畜においては、通常みられるような鐘を特定個体の首に掛けることがしばしばあるようである。

3-2. 個体認識と呼称

既に上述したように、一つの群は様々なカテゴリーの個体から構成されている。一般に群管理に従事する牧夫側からみて、群を構成する個体の認知、認識には程度の差があるが、トナカイ牧畜も例外ではない。ところがユーラシア大陸各地のトナカイ牧畜全般に関して、牧畜管理、個体認識という分野の研究は、スカンジナビアのサーミの研究を除くと極めて低調である。この視点からの研究としては、現代ロシアにおいてはエヴェンを調査した高倉浩樹²⁵くらいであり、ロシア人民族学者は、このテーマについてほとんど研究してこなかったのが実情である。これまでの筆者の現地調査は期間も十分ではなく、決して網羅的な情報ではないが、このテーマについてのデータを紹介しておきたい。

ギダン・ネネツに関しては上記で引用した2001年11月と2005年5月の個人経営キャンプでの聞き取りデータにより分析してみたい。まず2001年のデータでは、A経営体で19種類の個体呼称を得たが、うち1種がメスである他はカテゴリーは不明であった。B経営体で聞き取った22種類の呼称のうち、1種が種オス、9種が橈先導個体（うち8種が去勢オス、1種が不妊メス）、4種がメス個体のもので、その他はそれ以外の個体の名称（主として去勢オスのものであるが、カテゴリー固有のものではない）であった。

2005年のD経営体では、17種類の呼称を得たが、うち群先導個体（minarui）2種、橈先導個体2種、橈牽引用不妊メス5種である。またF経営体では、橈先導個体6種と去勢個体5種の名称を得た。このように、個人経営の群の中で固有名称を有しているのは、群先導個体、橈牽引先導個体（temg）、橈牽引個体（meta ty）が中心であり、一部メス個体、種オスにも固有の呼称が付されているという状

p.78)

²⁴ «Библиотека оленевода» Архангельск: Архангельское книжное издательство. 1957. Стр.34, 40. (『トナカイ牧夫の書棚』アルハンゲリスク: アルハンゲリスク出版所、1957、pp.34, 40.)

²⁵ 高倉浩樹『社会主義の民族誌—シベリア・トナカイ飼育の風景—』東京都立大学出版会 2000

況が見い出される。トナカイ牧畜においては、これらの個体名は、当該個体への呼びかけの呼称として使われることはなく、牧夫相互間の共通認識としての名称という性格を有していることが推定できる。共通の認識を有する必要性が最も高いのは、ほぼ毎日繰り返される橇牽引個体を捕獲する作業において、具体的な捕獲する個体について確認する際であろう（筆者はこの点について具体的に固有名を声に出して確認し合うのを確認できていない）。その結果、固有名を付される個体として最も多く提示されるのが橇牽引個体ということになるのであろう。上記（2001年のB経営体や2005年のD経営体）のように橇牽引個体の中に不妊メスが含まれていることも判明している。このことから、メス個体の中でも橇牽引個体は個体認識の必要性が高いことが窺われる。なお、具体的な固有名称を掲げ、その意味等について検討することは、別の機会に譲りたい。

3-3. 所有標識

ギダン・ネネツのトナカイ牧畜個人経営者においては、家畜トナカイの所有標識として理解されている耳印（khavontir）と胴体標識ピッテマ²⁶が併用される形で使用されている。

ロシア極北地域のトナカイ牧畜民の所有標識に関する現代の研究としては、古文書資料に依拠した、Yu.B. シムチェンコとA.I. グレフスキー2つの著作を挙げることができる。²⁷ その他に、ネネツの総合的民族誌を表したL.V. ホーミチが、ピッテマと耳印について簡単に言及している。ピッテマについては、彼女は言語学者G.D. ヴェルボフの1939年の学位論文を引用して、ヤマル半島の具体的なピッテマ5例の形状を、その使用者氏名とともに掲載している程度である。²⁸ また、近年出版された森林ネネツの著者による出版に、ヤマル・ネネツ自治管区プール地区の森林ネネツの胴体標識（森林

²⁶ “pidte”ma”：「ピッテマ」は元来「印、標識」の意である。なお、“tap”pidte”ma” [tar”は「動物や鳥の毛、羽毛」の意]という説明的な言い方もされるようである。（Терещенко Н.М. /сост./, «Ненецко-русский словарь» 2-е изд. СПб.: Филиал изд. «Просвещение». 2003. Стр. 463.) [テレシチェンコ N.M. 『ネネツ語ロシア語辞典』第二版、サンクト・ペテルブルグ：プロスヴェシチェニエ支部、2003, p.463]

²⁷ Симченко Ю.Б. «Тамги народов Сибири XVII века». Москва: Наука. 1965 (シムチェンコ Yu.B. 『17世紀のシベリア諸民族のタムガ』モスクワ：ナウカ、1965) ; Гулевский А.Н. «Традиционные представления о собственности тундровых оленеводов России (конец XIX – XX век)» Москва: Институт этнографии и антропологии РАН. 1993. (グレフスキー A. N. 『ロシア・ツンドラ・トナカイ牧畜民の所有権に関する伝統的観念（19世紀末-20世紀）』モスクワ：ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所、1993.）。

²⁸ Хомич Л.В. «Ненцы. Историко-этнографические очерки». М.-Л.: Наука. 1966. Стр.58-59. (ホーミチ L.V. 『ネネツ 歴史民族誌学的概説』モスクワ・レニングラード、1966、pp.58-59)。引用は Вербов Г.Д. «Диалект лесных ненцев». Рукопись дисс., защищенной в 1939 г. (Архив Института этнографии РАН) (ヴェルボフ G.D. 『森林ネネツ方言』1939年審査学位論文 [現ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所所蔵手稿文書])。筆者の管見では、この他には、19世紀中期の著作にもヤマル半島のネネツのものと思われるピッテマ（原文ではロシア語の「тавро」：ウマ、ヒツジ等に押す烙印、焼印）6例が示されている（Кушелевский Ю.И. «Северный полюс и земля Ялмал. Путевые записки». СПб, 1868. Стр.66. [クシェレフスキー Yu.I. 『北極とヤルマルの地。旅行記』サンクト・ペテルブルグ、1868, p.66])

ネネツ方言で“pitchama”)の例が挙げられている。²⁹残念ながら筆者はYu.B. シムチェンコの著作に触れていないが、A.N. グレフスキーによれば、ネネツの所有(個体)標識に関してはわずか3ページを割いているのみ、とのことである。これに対してグレフスキーの著作は、いくつかの古文書資料から転写した標識の例を掲載しつつ、ネネツの所有標識である耳印と胴体標識について、その起源や意味についても論考も含め、比較的詳細な記述がなされている(しかし、「耳印」を意味するネネツ語表記は記されていない。この点ではL.V. ホーミチも同様である)。

現代ネネツのこれら所有標識に関しては、その内容や種類について、これまで報告等一切なされておらず、今後の調査を待たねばならない。しかし現時点で筆者の把握するこれらの所有標識について述べておきたい。まず、耳印は、他の多くの牧畜民において見られるのと同様、耳に特定の形状の切り目を入れ、その左右の耳に刻印された切り込みの組み合わせで特定の家族(経営体)や個人の所有の標識とするものである。胴体標識ピッチマは、胴体部の毛を一定の形状にナイフで切り取るもので、皮は傷つけないようにする。左右両側に刻印するのが通例のようである。通常、いずれも春季の5月前後に満一年を迎える幼獣に施す。換羽したりして見えなくなってきたら、随時施す(トナカイの成獣の毛は夏に生え変わる)。2005年5月初めのD経営体滞在中のある日に、折しも幼獣に耳印と胴体標識を施す作業が行われた。朝、テント周辺に家畜を集群した後に、牧夫である主人は目ぼしい生後一年の幼獣を投げ縄を使って捕獲する。そしてその場に倒して押さえつけ(夫人の手を借りる)、両耳にナイフで切り目を入れ、その後で、胴体部の両側にナイフで毛だけを切り取ってピッチマを描く。その日はこの作業を十数頭の個体に対して行った(写真9)。



写真9

耳印を刻まれる幼獣

刻んでいるのが主人、右方でトナカイの
身体を押さえているのは夫人

(2005年5月6日)

耳印やピッチマの形状は、経営体(家族)毎に異なるのが通常である。即ち、経営体の主人が一つ

²⁹ Туругина П.Г. «Лесные ненцы. Сказания земли Пууровской». Новосибирск: Изд. СО РАН, филиал «Гео», 2004. Стр91-93. (トゥルーチナ P.G. 『森林ネネツ. プール地区の大地の物語』. ノボシビルスク: ロシア科学アカデミーシベリア支部出版、「ゲオ」支部, 2004, pp.91-93.)

の耳印とピッテマを有する。従って、一つの群は同一の耳印とピッテマを施された個体群から構成されるのが基本である。しかし、稀ではあるが、妻が婚姻の際に持参金 (nged-ya) として実家より生体のトナカイを持参してくる場合がある。その個体は妻の実家の耳印やピッテマを持ったまま群に伍するのが通例である。耳印には基本の形状がいくつかあり、そのうちの一つないし数個から成っている。それが左右の耳に施されるため、それらの組み合わせは相当数にのぼる。また、耳印の通例として、子が独立する場合、父親のものに追加する形が多く、男系で継承される耳印は同一氏族の場合、類似したものとなることが多い(ネネツの場合、一般に末子の男子相続が多いので、それ以外の男子は独立するのが通例である)。耳印は多くの牧畜民の許でみられる所有標識であり、トナカイ牧畜民の間でも珍しくない。未だ完全ではないが、筆者がこれまでに確認できた、現代ギダン・ネネツの使用する耳印の基本形を表2.に示しておきたい。上掲のグレフスキーの著作には、「アジア・ネネツのトナカイの耳印」として3つの基本類型からなる9つの類型が示されている。これらの3つの形態は表2.の「ヨホタ」、「マルク」、「ユト」に該当するものと思われる。表2.に示した基本形の中には、例えば脚注29に掲げた森林ネネツの胴体標識の例の中にほぼ同様の形式のものが多数見出される。また、葛野浩昭が収集したサーミの耳印に類似するものをいくつか見出すことが出来る。³⁰ネネツとサーミは明らかに文化的接触を行ってきており、耳印に関しても相互に影響を受けている可能性が十分考えられるが、この問題の考察は別の機会に譲りたい。

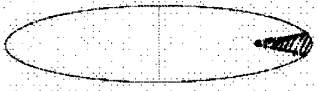
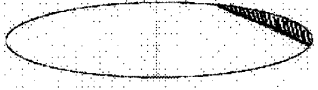
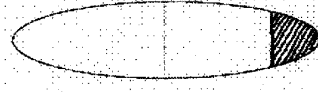
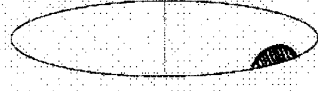
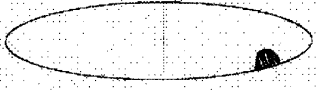
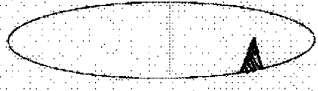
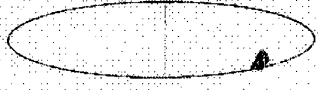
これに対してピッテマはネネツのトナカイ牧畜に特有な所有標識といえるかもしれない。グレフスキーの著作には、18世紀初期の古文書資料にあるネネツのピッテマ95種類、18世紀末の資料を引用したL.V. ホーミチの文献から引用した193種類(世帯主193人分)のピッテマ、そして出所の明記されていない17-20世紀のネネツのタムガ(所有標識)のプロトタイプ(17世紀10種類、18世紀2種類、20世紀4種類)が掲載されている。これらの例を以下の現代ギダン・ネネツの例と比べてみると、一部に類似例ないし同一と思われるがポジションの異なるもの(同一形態だが90-270度回転したもの)などが見い出される。

なお、グレフスキーは、個体標識としては、耳印の方がピッテマより古いという説を主張しているが、その根拠は必ずしも明確とは言えず、議論の余地がある。³¹ピッテマは主として幼獣に施すが、毛は毎年夏に生え変わるため、逐次刻印し直さなければならない。これまでの聞き取りの範囲では、形態的に安定していない成長途上の幼獣の標識という性格が大きいようである。なお、1995年4月のキャンプで、所有主不明の個体が自己の群に迷い込んだ際、それを自己のものにする場合にピッテ

³⁰ 葛野浩昭『トナカイの社会誌—北緯70度の放牧者たち—』河合出版1990, p.163. 図24. 例えば本稿表2中の「ヨホタ」、「マチュイ」、「マルク」、「セへ」はほぼ同一の形状を葛野の図中(それぞれ⑥、⑧と⑨、⑤、②)に見出すことができる。

³¹ Гулевский, «Традиционные представления...», стр. 179. (グレフスキー、前掲書、p.179) なお、グレフスキーは、「耳印は所有の概念とは関連が無い」(同上p.178)と明言しているが、その論拠は必ずしも説得的ではない。しかし、ここではこの問題の詳細には立ち入らないこととする。

表2 ギダン・ネネツの耳印の基本形*

| 基本形 | 元の意味 | 耳への加工の形状 | ポジション | 実際の形状** |
|--------------|---------------|-----------|-----------------------|---|
| ヨホタ(joyota) | 二股矢(水鳥捕獲用の矢) | 耳の先端の切り込み | 5(上寄り・中央・下寄り/左右) |  |
| マチュイ(machui) | ? | 端の切り取り | 4(上側・下側/左右) |  |
| マルク(malk) | 角なし(トナカイ)、無角の | 先端の切り取り | 5(上寄り・中央・下寄り/左右) |  |
| スフイ(sukhui) | ? | 切り取り | 多数(上側・下側/左右/1個・2個) |  |
| セヘ(sekhe) | 窪み、窪地 | 穴状の掻き取り | 多数(上側・下側/左右/1個・2個・3個) |  |
| ムイヴイ(myvy) | ? | 深い切り込み | 多数(上側・下側/左右/1個・2個・3個) |  |
| ユト(yut) | 剥離、割り取り | 割り取り | 多数(上側・下側/左右/1個・2個・3個) |  |

* 筆者のフィールドデータに基づき作成。これらの基本形が耳の片側ないし左右両側、上下、斜め、あるいは片側に複数(ユト等)に施されることで、それらの組み合わせが多数出来、他との類別・識別が可能となる。なお、ここに挙げたものはこれまでに筆者により聞き取りで得られたものであるが、網羅的なものではない。

** 図は耳印を表示するのに慣例となっている形式で、右側が右耳、左側が左耳であるが、本図においては、耳印の基本形を示すために便宜的に使用した。

マを施す場面に遭遇したことがある。このようなケースは頻繁にはみられないであろうが、何らかの理由で所有を強く主張する必要がある場合にピツテマを施すことは、慣例として存在するようである。筆者が確認できた現代ギダン・ネネツの間で使用されているピツテマの形状としては、櫛型、V字型、鉤型、T字型等がある(いずれも方向によって4つのポジションがある)が、いずれもナイフで胴体の毛を加工しやすい形状といえる。(図7及び写真10参照)。

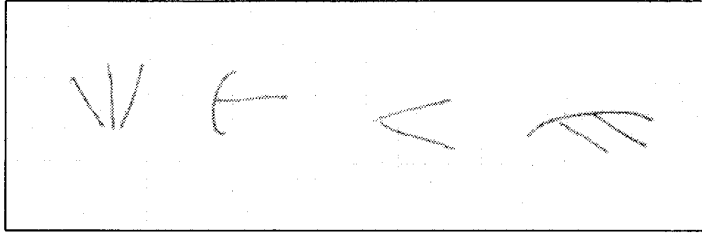


図7. 現代ギダン・ネネツの使用するピッテマの例

左端はカモの足、右端は橇のヴァリエーション(180度反転したポジション)など、意味を持つ形象であることも多い。



写真10

胴体に横鉤型のピッテマの施された幼獣(二才の未經産メス)(2005年5月17日)

この標識形態は、A.I. グレフスキーの引用するネネツのタムガのプロトタイプのうち17世紀の10例の中に同一形と思われるものが見出される。

4. 結語

以上、2005年春季のギダン・ネネツのトナカイ牧畜個人経営者における調査の成果について、ヤマル・ネネツ自治管区のツンドラ・ネネツ全体の状況をも参照しつつ、群の構造と実態の側面から牧畜管理の状況を概説した。春季のギダン・ツンドラは、前半は未だ氷点下の真冬日の連続であったが、5月中旬以降は雪融けも進行して橇の移動が困難になり始まる時期であった特に橇による河川や湖沼、湾の水上移動が困難になる時期であり、筆者がネネツの御者の操縦する橇でツンドラから集落に送り届けてもらって戻った5月22日は、開氷の進行する河川や湖沼を前に、しばしば立ち往生しつつ、融雪水に水没しながら進む行程であった。

上述の通り、ヤマル・ネネツ自治管区、とりわけターゾフスキー地区の個人経営者下の家畜トナカイの頭数は、増加率は逡減してはいるが、増加し続けている模様である。この地区においてみられるこの状況は、トナカイ牧畜の今後を考えるうえで大変重要である。第一に、個人経営者下でのトナカイ牧畜文化には、多くの点で民族文化を連綿と継承している要素を多く見出せるからである。そのことを記述し分析するという人類学者の視点と仕事がまた山ほど残されているという点で、もちろん

ん貴重である。しかし、同時にそれは、今後のトナカイ牧畜はいかにあるべきか、という実務的問題をも提起している。頭数増加という点だけをみても、既に過放牧状態が憂慮すべき状況にあることが地元の農業当局や関係者から指摘されて久しい。その解決法の一つとして、他地域（ハンティ・マンシ自治管区やサハ共和国）への移送の試みも行われてきた。また、個人経営者の協同組合理型組織化の試みも継続されている。このように、西シベリア北部のネネツによるトナカイ牧畜は多くの問題と課題を抱えており、そのためにも人類学者を含む、より広範な分野の調査活動全般が今後とも必要とされる。

* * *

本調査の収集データとしては、映像記録資料（表1のD及びF経営体における撮影、ギダ集落における撮影）がある。その中には春季のツンドラ・ネネツにおける牧畜管理技術を中心にした映像資料があるが、その分析は別の機会に譲りたい。所有標識に関しても、耳印、胴体標識（ピッテマ）のいずれも、未だ網羅的に収集できておらず、また確認できないものがあるために、詳細な記述は行わなかった。個体認識に関するデータも同様である。これらのデータの分析や解釈には、今後の現地調査で更に詳細かつ正確な情報を収集する必要がある。

集落や都市における行政当局（ヤマル・ネネツ自治管区行政政府農業局、ターゾフスキー地区行政政府北方先住少数民族委員会、ギダ集落行政政府等）からも統計資料を中心としたデータを入手した。その一部は上記の「2. 群の構成と特徴」を中心に利用している。なお、本稿の図表において依拠した資料類の出典は稿末にまとめて記した。

最後に2005年の調査は、平成16年度日本学術振興会特定国派遣者プログラムとして（研究課題「ロシア・シベリアのトナカイ遊牧ネネツの生存・生業・生活の技法に関する民族学的研究」）として遂行されたことを記しておきたい。同会の関係者に、この場を借りて深謝します。

また、本調査の実施に際して、以下の諸機関の職員をはじめとする多くの現地機関等の職員・住民の協力を得た。ここに記して感謝申し上げたい：ヤマル・ネネツ自治管区議会（ドゥーマ）S.N.ハリューチ議長、同行政政府L.P.ヴェロ副行政長官、同行政政府涉外・対外貿易部職員、同管区ターゾフスキー行政地区行政政府北方少数民族委員会R.Kh.ヤンド議長、同地区ギダ集落行政政府J.P.ヤル行政長官。

図表出典

図1：筆者作図

図2：1931-1993：Подкорытгов Ф.М. «Оленеводство Ямала», Сосновый Бор: 1995, стр.6, таб.1（ポトコルイトフF.M. 『ヤマルのトナカイ牧畜』ソスノーヴィー・ボル：1995、p.6、表1.）；

1994-2005：ヤマル・ネネツ自治管区行政政府農業局資料

図3：ヤマル・ネネツ自治管区行政政府農業局資料

図4：1997,2001,2005：ターゾフスキー行政地区行政府北方少数民族委員会資料

図5：ギダ集落行政府資料（経営体別生計台帳）

図6：ギダ集落行政府資料（経営体別生計台帳）

図7：アンドレイ・ヤル（ギダン・ネネツ）作図

表1：筆者のフィールド資料（2001年及び2005年）

表2：筆者のフィールド資料（2001年及び2005年）

写真1-10はいずれも筆者撮影。写真4-10はギダン・ツンドラ内のギダン・ネネツのキャンプ地での撮影。

（よしだ あつし・千葉大学文学部）

Tundra Nenets Reindeer Herding: Structure and Practice
(Field Report among Gydan Nenets Herders in Spring, 2005)

YOSHIDA Atsushi

Summary:

This article concerns about the analysis of recent reindeer herding situation among the Tundra Nenets in the Yamal-Nenets Autonomous District, Russian Far North. After the breakdown of the U.S.S.R. in this District, apart from other regions, the number of domestic reindeer has constantly increased and they constitute over 40 % of the total number of domestic reindeer in Russia (circ. 1.3million head), over 60% of which are kept under private herders.

The author analyzes structure of the reindeer herds inside the District, especially among the Gydan Nenets in the Tazovsky administrative region. The result of this analysis shows that ratio of certain categories of the herds (female, male deer and the castrates) reflect the herds' scale and character, and that among private herders the Nenets have routine practice of using female deer as sledders.

The author's observation of the reindeer herding in some spring camps inside Gydan Tundra in 2005 made some characteristics of private herds clear, for example: birth season's special care for the herders, the female deer with antler in power, usage of "longali" (hanging wooden stick for obstacle to running fast) for the castrates and so on. Beside that, the contemporary practice of using of property marker for reindeer (earmark /khavontir/ and body marker /pidte''ma/) is described with concrete examples, corrected during author's fieldwork.